

J E C の源流と歴史的遺産 10

近代のリベラリズムと J E C

一宮基督教研究所 安黒務

近代のリベラリズムと J E C

今回は、敬虔主義の遺産と J E C の関係についてみました。今回は、自由主義（リベラル）教会と福音主義（エバンジェリカル）教会の対立の構図の中の J E C の位置づけを考えてみましょう。現在、J E C では「日本福音同盟」への加盟の方向で相談が進められていますが、そのことの歴史的意義はこの構図を理解するとよく分かるので少し長くなりますが詳述させていただきます。

18世紀の啓蒙思潮とはⁱ

プロテスタント神学は、17世紀の正統主義において一つの完結に達したと見られていますが、18世紀に入ると強力な嵐に見舞われました。その嵐とは、一般に「啓蒙思潮」として知られているヨーロッパの思想運動のことです。カントという哲学者は、「啓蒙」ということを「人間が自分の未成熟状態から抜け出て成人になることである」と言っています。このことは、具体的には、教会の監督や指導に従っている状態（他律の立場）から自由となって、あらゆる事柄において自分自身の理性に立つことにほかなりません。つまり、今までの伝統、権威、慣習からいっさい解放されて、自律的理性の立場に立つことを意味しています。これはカントの『啓蒙とは何か』（1784）の中心をなす思想ですが、この主張は何かエデンの園で神の権威に挑戦したサタンの語りかけと類似しています。サタンは人間に「神は、ほんとうに言われたのですか」（創世記 3:1）、「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになる」（創世記 3:5）と詰め寄り、神の権威からの独立の道を勧めたのでした。このような自立的理性の立場を根本とする啓蒙思潮は、全体として見ると、理論では科学的自然主義をとり、倫理においては相対主義的な理性道徳、宗教については、伝統的な教会の啓示宗教に反対して理性宗教ないしは無神論をとり、歴史については進歩を確信していました。

啓蒙思潮を背景にした19世紀の自由主義(リベラリズム)ⁱⁱとは

具体的には、近代科学と聖書が衝突する場合には、科学に権利を譲るべきであると考えました。また超自然的な要素や神的歴史を内蔵している聖書歴史の信仰性に疑問を付すようになりました。キリスト教の絶対性を否定し、宗教を評価する上での相対主義が主張されました。自由主義（リベラリズム）とは、このような啓蒙思潮の考え方に批判・改革の道ではなく、「適応・適合の道」を選ん

だキリスト教の流れのことです。リベラリズムと言っても、広範囲な世界ですが、主な流れとしてジョン・トーランドの『神秘的でないキリスト教』によって代表される英国の理神論や、啓示内容を“人間理性の網”に引っかかる真理に限定し、原罪、永遠の刑罰、悪魔、神の子キリストというような**伝統的教義を否認**する19世紀の自由主義神学をあげることができます。

20世紀におけるプリンストン神学校のリベラル化事件

20世紀における歴史的な事件のひとつの実例として、以前紹介しましたプリンストン神学校の出来事を紹介しておきましょう。「プリンストンと言いますと、長年、米国合衆国長老教会の**中心的な神学教育機関**であったばかりでなく、北米大陸における歴史的改革派信仰の**牙城**（がじょう）でもありました。一貫して聖書の信仰を保持し、その学的宣揚につとめていました。しかしながら、1924年頃のプリンストンの事情は、だいぶ違っていました。当時、米国の教会全体が、次第に浸透しつつあった自由主義神学の問題に直面していました。長老教会もその例外ではなく、その年に、聖書の**十全靈感**、キリストの**処女降誕**、キリストの**代償的贖罪**、キリストの**からだの復活**、キリストの**奇跡**、の**五点を否認**するという内容の<**オーバン声明書**>が出され、1292名にのぼる牧師たちがそれに賛成の署名をする事件が起りました。...1929年に、プリンストンは二つに割れ、メイチェンたち、歴史的改革派信仰に忠実たろうとする教師たちを中心として、フィラデルフィアにウェストミンスター神学校の創設が余儀なくされるに至りました。ⁱⁱⁱ」歴史に目を開きますと、「それでキリスト教でありうるのか？」と首をかじげざるを得ないようなことも起こってきました。

福音主義同盟の結成の歴史的背景

時計の針を百年ほど戻しますと、このことに関連して、自由主義が隆盛をきわめようとしていた時期に起った一つの歴史的出来事に注目することが大切です。それは1846年にロンドンで結成された**福音主義同盟**（Evangelical Alliance）です。当時、ヨーロッパは政情不安の中にあり、キリスト教界は自由主義の問題の大きさを感じ始めていました。こうした状況の中で、1846年8月19日から23日にかけて前述の会議が開催されました。これには**聖書の信仰に基づく国際的一致と協力**の必要を強く感じていた世界の50教派から800人の代表が参集しました。会議のハイライトの一つは、何ととっても次のような**9項目より成る福音主義信仰**を確認し、それを全教会に向かって表明したことでした。聖書の**神的靈感**および**神的權威**、聖書の**充分性**、**聖書解釈**における個人的判断の権利および義務、**三位一体の神**、**アダムの墮落の結果としての人間の全的墮落性**、**神のひと**

り子の受肉、人類の罪のための彼の贖いのわざ、彼の中保的とりなしと支配、信仰のみによる罪人の義認、罪人の回心および聖化における聖霊の働き、霊魂の不滅、肉体の復活、正しい者の永遠の祝福と悪い者の永遠の刑罰を伴う、主イエス・キリストによる世界の審判、キリスト教伝道者職の神的制定、洗礼と聖餐の二礼典の義務と永続性。このような信仰の立場は、宗教改革の立場を強調していた19世紀中葉のイギリス・プロテスタントの基本的信仰を反映したのですが、19世紀末から20世紀にかけて誕生をみた今日の多くの福音的な諸教会や諸団体の信仰規準は、だいたいにおいてこの9箇条を基本に作られていきました。19世紀半ばに、アメリカのバプテスト教会を背景にスタートしたスウェーデン・バプテストの諸教会とそれを母体としてきたオレブロ・ミッション（現在インターアクト）も同様の信仰告白をもっています。オレブロ・ミッション（現在インターアクト）もスウェーデン福音同盟の一員であり、それを通して世界福音同盟のメンバーです。以上のことを念頭におきますと、JECの日本福音同盟への加盟は歴史的必然と言えます。

JECと福音同盟加盟問題の経緯

12月にJECから封筒を受け取りました。その中には「私共の長年の懸案でありました『日本福音同盟（JEA）への加盟』について、理事会では加盟の方向で話し合いを進めております。」との理事長の富浦師の挨拶文と関連資料が入れてありました。私の感想は「ついに来るべきものが来た。」「少し遅すぎるくらいだったかも知れない。」というものです。以前オレブロ・ミッション（現在インターアクト）のアジア局長が来日された時、東京で訪ねられた場所が「日本福音同盟」の事務所であり、「JECはなぜ日本福音同盟に加盟しないのですか？」と尋ねられたとのことでした。当初からJECの側にはまったく問題はありませんでした。問題は、むしろ日本福音同盟の側にありました。それは日本福音同盟が形成されていった歴史的経緯に関係があります。日本福音同盟は、改革派系諸教会が中心の日本プロテスタント聖書信仰同盟（JPC）とホーリネス系諸教会が中心の日本福音連盟（JEF）が母体となって形成されていきました。それらの教会は当初から「ペンテコステ的・カリスマ的な聖霊経験（使徒時代の超自然的な聖霊の賜物の働きを今日も普遍的日常的に経験できる）」を行き過ぎたものとみていました。それで日本福音同盟への加盟条件に「いわゆるカリスマ条項」を付加していたのでした。世界の福音同盟の大半がペンテコステ・カリスマ派に対して開かれたものであり、彼らはその中できわめて重要な貢献をしておりましたが、日本ではペンテコステ・カリスマ派に対して“白い目”が向けられていたのでした。その結果としてペンテ

コステ・カリスマ・第三の波の諸教会の交わりの中として「**日本リバイバル同盟**（NRA）」が結成されました。極論しますと日本では「**神学を重視し、聖霊経験を軽視する流れ**」と「**聖霊経験を重視し、神学を軽視する流れ**」がありますが、JECは二つの流れの真ん中に位置しており、歴史的・正統的な神学にしっかりと根ざしつつ、聖霊経験にもオープンな、バランスのとれたユニークな群れです。日本福音同盟側が「いわゆるカリスマ条項」を取り下げた今、JECの日本福音同盟への「**加盟の時は満ちた**」と言えると思います。JECは二つの流れの間にあり、両者の**架け橋的な役割**が期待されています。

「福音派」についての誤解と真の定義

福音派と申しましたが、その範囲についての定義はさまざまです。ときどきカリスマ派対福音派といった具合に**狭い意味で対置する傾向**が見受けられますが、これは「福音派」の**真の定義**^{iv}と**神の御旨**を見失わせる危険があります。今日の現象や議論のみに目を配るのではなく、歴史的かつ神学的に掘り下げて検討することが大切です。宇田師は「福音派とは、1846年に結成をみた**福音主義同盟の9項からなる信仰基準**^vと、1974年の世界伝道会議がだした『**ローザンヌ誓約**』の中に表明されている聖書的信仰と宣教観を信奉する、**聖霊派から改革派までのキリスト教共同体、あるいは連合体**を指す。」と簡潔に表現されています。ペンテコステ派・カリスマ派・第三の波と呼ばれる諸教会は、当然のごとく「**モザイクのように個性と特色をもつ多様な教派の集まりである福音派の一員**」なのです。

歴史的必然としてのローザンヌ誓約への応答

JEC宣教50周年で採択されました<**ローザンヌ誓約第七項** 伝道における協力>には、以下の通り誓約されています。「私たちは、**真理に根ざした、教会の可視的一致**が神のみ旨であることを確認する。伝道はまた、私たちの一致を強く求めている。なぜかといえば、私たちの間の**不一致**が和解の福音を台無しにしてしまうように、私たちの**一致**は私たちのあかしを強化するからである。だが、私たちは、組織・機構上的一致は多くの形態をとり得るものであり、それは必ずしも伝道を推進するものとはかぎらないということも知っている。とはいえ、**同じ聖書的信仰に立つ**私たちは、交わりと、働きと、あかしとにおいて、**一致を密にすべき**である。私たちは、私たちのあかしが、時として、利己的な個人主義や、むだな重複によって、損なわれてきたことを告白する。私たちは、真理と、礼拝と、聖潔と、宣教とにおける、**より深い一致**を求めて行くことを約束する。そして、私たちは、教会の宣教

活動の前進のために、相互の士気を鼓舞するために、資力と経験とを互いに分ち合うために、**地域的な協力**と、**機能上の協力**をより一層発展させて行くことを推奨するものである。^{vi}」誓約にある通り、JECのみでなく、ペンテコステ派・カリスマ派・第三の波と呼ばれる諸教会の「日本福音同盟」への加盟は、**歴史的必然**であり、**神の御旨**に沿ったことであると確信します。

i 宇田進「福音主義キリスト教と福音派」いのちのことば社、1993、pp.125-126

ii 宇田進、前掲書、pp.126-129

iii ジョン・マーレー「聖書の贖罪観」オランダ・キリスト教文庫、1993、宇田進『補論：プリンストン神学とジョン・マーレー教授』pp.78-79

iv 熊澤義宣、野呂芳男編「総説 現代神学」日本基督教団出版局、1995、宇田進『現代福音派教会の神学』pp.187-188

v 宇田進「総説 現代福音主義神学」いのちのことば社、2002、pp.435-440

vi J.R.W.ストット / 宇田進訳「ローザンヌ誓約 解説と注釈」いのちのことば社、1976、pp.64-65